

# 死とは何か

桑原啓善

初出『シルバー・バーチの会』六月号第十号1985年6月1日  
現在は『人は永遠の生命』の第6章

桑原啓善は日本の正統な心霊研究を浅野和三郎、脇長生の門で学び、シルバー・バーチやホワイト・イーグルをいち早く翻訳紹介するなど、戦後日本のスピリチュアリズムを牽引した。本稿は1985年5月1日の講話で、現代科学（医学）がとらえきれない「死とは何か」を語った記録。

## 目次

十五歳の少女の自殺

死についての世間の考え方

死はいわば臍<sup>へそ</sup>の緒の切断

死はやさしい眠りからの目覚め

死は神々の誕生？

死後幸福の条件

## 十五歳の少女の自殺

十五歳の少女が自殺しました。昨年暮、長野県松川村での出来事です。その少女は学校の成績もよく、家庭的に何の問題もなかったのですが、首をつつて死んだのです。

遺書とみられるノートに、こう記してありました。

「私が生死を安易に考えていると思うかもしれませんが、惰性で生きているのはいやなのです。人が考える不幸は私にとって幸福に思えたのです。毎日が冷たく悲しかった。もうすぐ苦しみから解放されるということだけが楽しみでした。」

何と悲しい遺書ではありませんか。人が考える不幸が自分の幸福であるとか、人生が冷たく悲しいとか、これでは生きておれませんね。この少女を自殺に追いやった原因は何でしょうか。それは「もうすぐ苦しみから解放されるということだけが楽しみでした」、これが犯人です。何故でしょうか。

少女は、死は生の終わりと考えていました。ですから、苦しみを絶つために自分の手で命を断つたのです。それにもう一つ、ここには書いてありませんが、「毎日が冷たく悲しかった」、こう少女に思わせたものは何でしょうか。それも「死は生の終わりである」これが犯人です。

心霊研究ではこう教えます。人が「死は生の終わりである」と間違った知識をもつ限り、今生でも死後においても、決して幸福はあり得ないと。何故でしょうか。

私はこの章を、このことを説き明かすため、この少女と、また、この少女と同じ考えをもつ、多くの他の少女や少年や大人達のために書きます。

## 死についての世間の考え方

一般に、世間では死について何と考えているでしょうか。近代科学の祖といわれるフランシス・ベーコンはこう申しました、「子供が暗闇に行くことを恐れるように、人は死を恐れる」と。また孔子はこう言っています、「いまだ生を知らず、いづくんぞ死を知らん」と。つまり、古今の二人の賢人は「死は恐ろしいもの」「死は分からぬもの」と言ったのです。そしてそれが世間一般の考え方でもあるのです。

しかし他方で、ギリシャの哲人プラトンはこう言いました、「哲学は死にたいする準備である」と。つまり、生きる道を学ぶのが哲学です、それが死にたいする準備とはどういうことでしょうか。それを裏返すと、よりよく生きるとは死についてはつきりした考

えをもつようになること、そういうことでしょう。さて、現代文明は死について何といつているでしょうか。「死は生の終わりである」これが定説です。

「死は恐ろしいもの」「死は分からぬもの」「死は生の終わり」、思えば人類は、何とどうあやふやな、また間違った死についての見解をもちつづけてきたのでしょうか。ここに現代文明の不幸があります。十五歳の多感な少女の死があり、戦争や公害や人心荒廃や、諸悪の因があります。この定説は全部間違いです。「死は優しいもの」「死は分かるもの」「死は新しい生の始まり」これが死の真相です。私はこの事を、近代心靈研究に基づいて、以下述べてみたいと思います。

## 死はいわば臍へその緒の切断

アメリカの心靈研究家で秀れた靈能者ハドソン・タトルが、死の瞬間を靈視して、次のように述べています。

「徐々に、靈体は手足から脱け出し、頭の方に凝縮する。やがて頭頂から後光が現わ

れ、大きくなる。次第にそれは形を現わし、遂に、脱け出した肉体と全く同じ形になる。霊体は高く上がり、一個の美しい霊が私の前に立つ。他方、肉体は下に横たわっている。だが、一本の細い紐が霊と肉体をつないでいる。この紐は次第にうすれていき、やがて消滅する。こうして霊は永久に地上と縁を切るのである。」

これは霊の面から見た死の描写です。これと同様な霊視の報告は沢山あり、従ってこれは最も平均的な死の状況を示したものです。

大霊覚者 A・J・デヴィスも、胃癌で死ぬ六十歳の婦人の死を霊視して、こう告げています。

「その時、この婦人から発しつつとり巻いている霊的大気の中に、もう一つ別の頭部がもうろうと出現した。そのもうろうたる頭部は、輝きつつ形を変え、順次、首・肩・胸、遂には全身の心霊体を整然と現わしていった。……霊肉の最後のキツナが断たれる直前、心霊体は肉体頭部の右上方に立ち上がった。空間に浮びた心霊体の足と、横たわる肉体の頭部との間には、活電気の輝いた流れが烈しく動いていた。この活電気の一部分が

臨終の肉体に戻ってきた。と、その瞬間、肉体を結ぶ最後の糸は完全に断たれた。」

死とは、どうやら、肉体から蟬のように、霊体が脱け出すことなのでしょう。その光景がきれいに描写されています。それにしても、この霊体と肉体との間には、何やら二つを結ぶ紐のようなものがあると言っていますね。そうです。その紐がいわば生命の糸でしょうか。マイヤースは有名な霊界通信『永遠の大道』の中で、霊の側から見た〔死〕について、その紐のことをこのように言っています。

「複体（筆者注、肉体から脱け出した心霊体）と肉体とは沢山の細い紐と、二条の銀色の紐とをもって互いに結び付けられている。右の二条の紐の中一つは下腹部に、他の一つは脳に連繫されているが、それは驚くべき弾力性に富んでいるので、睡眠中にいくらでも必要に応じて延長する。これら大小の紐は、人が静かに死する場合には、きわめて徐ろに千切れ、そしていよいよ重要な二本の紐が、下腹部と脳との連絡を失う時こそ、とりも直さず死なのである。」

死とは何か。マイヤースはここに明瞭に記しています。肉体と心霊体を結ぶ紐の切断、

これが死であると。この紐とは、いわば人間の胎児と母体を結ぶ臍の緒であって、この切断の瞬間、胎児は産声を上げ、自分の口で呼吸を始め、母体から切り離され一個の独立した人間、生命体となります。

死はまさにこれです。母体に当るのが肉体。心霊体は、いわば母体から脱け出した新しい生命体。この生命体と肉体とを結んでいたのが「銀色の二条の紐」つまり臍の緒です。死はまさに誕生ではありませんか、しんじつの自己である心霊体が肉体から脱け出すことの。そして、死とは、まさにこの臍の緒、「銀色の二条の紐」の切断にすぎないのです。

マイヤースは、ですから、死、この新しい誕生を、別の見方で「死の秘密は、ひっきょう自己のまとう外被の振動する速度の中に見出される。地上の人間は何によつて自己の環境を知り得るか。それは彼の肉体が、ある特殊の速度で振動しているからである。試みに汝の肉体の振動速度を変えてみるがよい。その瞬間に大地も、男も女も、その他一切の物も、全部汝の視界から消失し、同時に汝自身も彼等の視界から消失する。しかるが故に死とは、単に振動速度の変化である。」

テレビやラジオの波長のように、肉体も物体も振動していると言われます。私達がこ



の目で物を見、物に触れて固いと感じるのは、物質と私達の肉体が同じ振動数をもっているからです。いまラジオやテレビの波長を変えようと、その音も映像も消えるように、私達が肉体から違った波長の心霊体に、生命の本拠を移すと、その波長が変化し、物質世界は消失します。それとともに、物質世界の人の目から私達の姿は消えます。これが死です。つまり死とは単に見えなくなっただけです。しかし私達は死んだのではなく、新しい心霊体で、その心霊体と同じ波長をもつ心霊界で、丁度、物質界で物に触ったり、物を見たり、他者と談笑したりするように、全く新しい同じような生活を始めているのです。

ですから、死とは「生の終わり」でなく、新しい生の始まりです。

人間の文明は何と永い間、死について思い違いをしてきたことでしょう。死とは肉体と心霊体を結ぶ臍の緒の切断、生命の宿が肉体から心霊体へ移ったことによる振動速度の変化にすぎないのです。

## 死はやさしい眠りからの目覚め

やはり有名な霊界通信『ジュリアの音信』の中で、ジュリアはこう告げています。「死ぬ時は苦痛を感じず、唯、非常な静穏と平和とを覚えた。覚醒した時、私は平常にかわつて、大いに健康であるように覚えた。……最も普通の死は、苦痛なき覚醒である。即ち、死は深い熟睡よりの心地よい覚醒である。」

A・J・デヴィスは、死の「苦痛なき覚醒」について、次のように記しています。霊視による死の記録です。

「肉体も魂もともに、両者の不可避の永遠の離脱を押し止めようと努力した。これらの闘いは肉眼で見ると、烈しい苦悶や恐怖の状態に見えた。だがそれは外見上だけで、本当は苦痛も恐怖もなく、霊魂が肉体との結合を、ここで永久に解き放そうとしているだけだった。」

心霊研究家カーリントンは、その著『生と死』の中で、死を嬰兒の誕生に比して次のように述べています。「一般の所信に反し、臨終には苦痛のあることは稀である。……誕生の時、嬰兒にもし意識があれば、最も苦痛の多い死よりも更に甚だしい苛責に遭遇するものである。しかし、嬰兒は全く無感覚である。脳髓が、意識的印象をうけることの出来ぬ無意識の状態で生まれるから。嬰兒がこの世に現出するのは〔自然の麻醉〕と

いわれる冥闇状態の中に行われるのである。」

嬰兒の誕生は〔自然の麻酔〕によつて無痛覚の中で行われる。死も全く同じ無意識の中で行われる。卓抜な霊界通信『パワーズの心霊哲学』は、この事を次のように説明しています。

「世界した殆んど全部は、肉体離脱が始まると、その自我意識は休止する。彼等はめつたにその経験を理解していることはない。だが、ある者達は、万事終了後、ぼんやり何か状態が変わつたらしいことを感じるらしい。このことは、誰ひとり、他と同じ経験をもつ者はいない。今日まで、まだ唯の一人も、肉体離脱から、霊的世界へ移動の過程を、はつきり目覚めたままで過ごした者はいない。」

このように、死は無意識の中で行われます。臨終の人の顔がどんなに苦痛でひきつつても、それは見せかけで本人は無意識、外見の苦悶は、肉体から霊が脱け出すための作業にすぎない。誕生と全く同様に〔自然の麻酔〕が行われるのです。それは無意識というよりもむしろ、「死は深い熟睡よりの心地よい覚醒」『ジュリアの音信』なのです。従つ

て、科学の祖F・ベーコンが「死は恐ろしい」と言った俗説は全く間違いないのであります。

## 死は神々の誕生？

人は何のために死ぬのだろうか。死は、嬰兒のように、心霊体をまとって、自然麻酔の中で、新しい世界への誕生だとするとき、死は何のためにあるのだろうか。

パウーズの『生命哲学』では次のように言っています。「死とは誕生と同じく、自然であり、かつ重要なものである。むしろ誕生は消極、死は積極的な意味をもつものである。人は生命法則を知らないが故に、かのすばらしい生命の上昇過程の最初の経験を、死と名付けて、生命の終焉なりとしている。」

死は誕生であり、むしろ誕生よりも積極的な意味をもつ、とはどういう事でしょうか。パウーズは、生命を、誕生以前の、つまり神から生命が分かれて、地上に生まれてくるまでの「下降過程」と、次に、死によって、生命が他界の各段階を通過して神へ帰って行く「上昇過程」の二つに分けて見えています。なぜ生命は、そんな下降・上昇の二つの過程をもつかというと、ここに、いわば生命の秘義があります。

人間とは、「神の火花」です。この宇宙の諸天体にいる人間、吾々もその一つで、神性の分身です。これが濃厚鈍重な物質世界に生まれてくるには、その火花は余りにも精妙すぎて波長が合いません。そこで、他界の各世界、つまり亜神界・霊界・幽界と一つずつ下降しながら、裸身の神の火花は、その身に、本体・霊体・幽体と媒体をまとうていきます。これが下降過程です。その度に、波長を下げ地上に近づきます。そして最後に、受胎によつて二人の男女を親として、その受精卵に自己を同化させます。この胎児の誕生が、即ち神の火花、いわゆる人間の誕生です。

神の分身ともあるうものが、何故わざわざ鈍重不自由な物質界に生まれるのでしょうか。それは、その不自由さ、つまり生きるための利己・闘争を経験することによつて、個我意識を芽生えさせるためです。つまり、神の火花は、そのままでは純粹、神性そのものですが、神と同じような、独立した意志・個我意識はもっていません。従つて、人間の「神秘的な神に似た者」が、一個の神になるための、荒行の出発点が地上の誕生です。ですから「自然麻醉」で生まれる嬰兒は、いわば神の神性の芽生えのためのスタートラインに立ったのです。

さて、上昇、つまり死は、何を意味するのか。地上経験を積んで個我の芽生えた人間は、

とても神とは申せません。場合によってはエゴの固まりです。このエゴ、つまり「我<sup>が</sup>」の垢を、今度は落さねばなりません。この垢を落とす作業の出発点が死です。他界、即ち幽界・霊界・亜神界と、我を落として浄化させていく上昇過程が、死によって始まるのです。死はいわば神性を開花させていくスタートラインです。

このようにして、神の子である人間には、二つの大きな誕生があります。神性を発芽させるための地上への誕生、それと、神性を開花させるための他界への誕生、即ち死、この二つの誕生です。この二つの誕生の関門を通過して、どの神性の火花も一個の神となります。これが人間です。従って死とは、神々の誕生、その祝すべき門出の一日です。

十五歳で自死したあの少女を、私はもう一度思います。この子を殺したのは、この少女じしんではありません。死を生<sup>の</sup>終わりと教えた、現代の文明、学校、教師、大人たちです。いたましい事ですが、遺書にこの子が書いた学校や教師への恨みは、大局において誤っていません。そして、生きることは「冷たく悲しかった」と書いたこの言葉も、もし、この少女がしんに死の意味と、人間の真相を、大人達から聞かされていたら、生きることは「楽しくて素晴らしい」もの<sup>に</sup>変わっていただろうと、悔やまれてなりません。